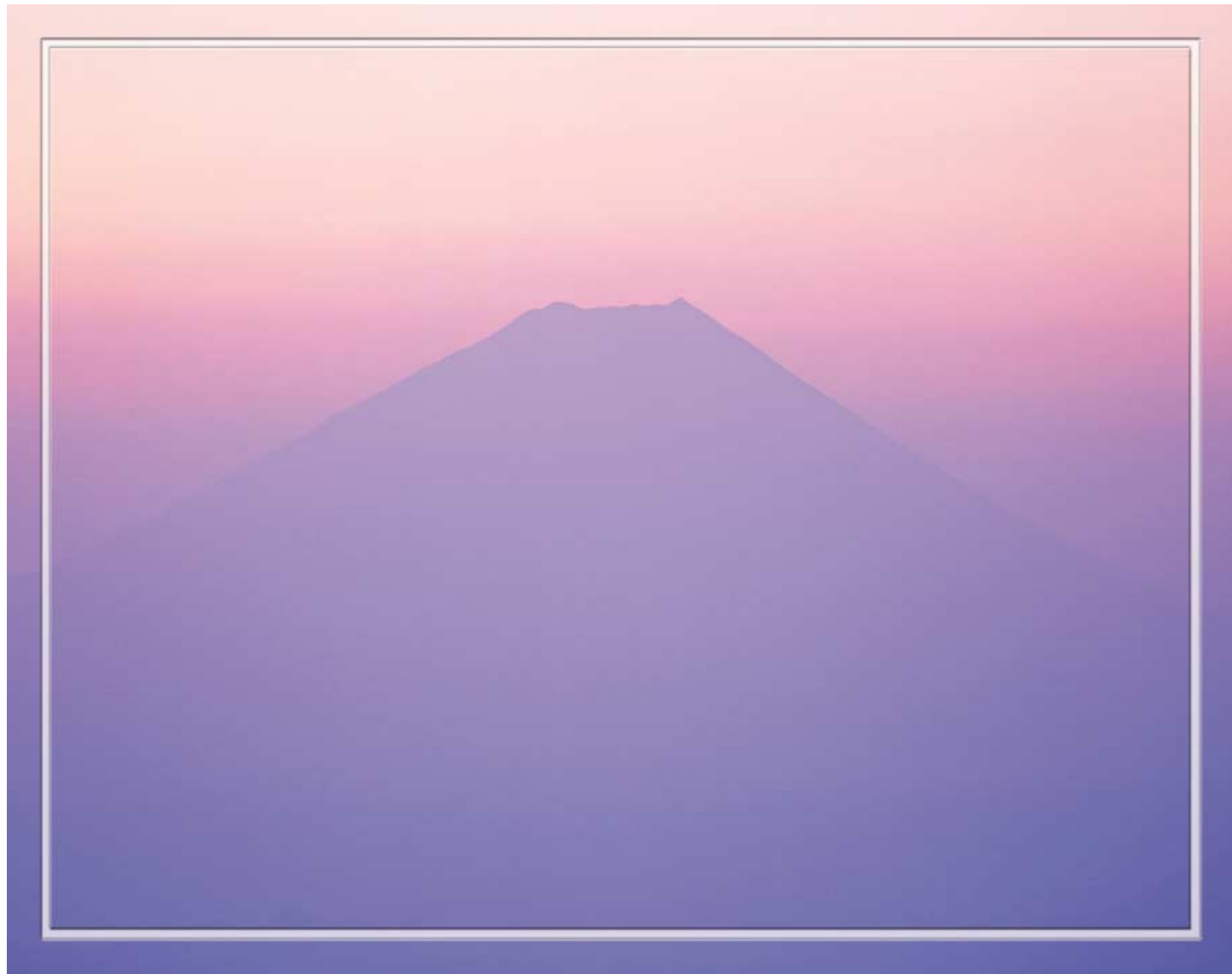


国立情報学研究所ニュース

No.27 April 2005 平成17年4月



巻頭言 所長就任に当たって 国立情報学研究所長 坂内 正夫

巻頭言 退任挨拶 前 国立情報学研究所長 末松 安晴

公募型研究 No.7 キーワードマップ型情報可視化システムのインタラクティブ
情報収集への応用に関する研究 国立情報学研究所 村田 剛志

4 **研究活動** コンピュータによる情報・コミュニケーション活動支援の研究／国立情報学研究所情報学オープンフォーラム第4回(1月31日) ● 国際学術情報流通
基盤整備事業と日本の数学雑誌 ● 世界数学電子図書館 ―数理科学における基盤構築の必要性／文部科学省科学研究費補助金(特定領域研
究)「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」平成16年度成果報告会(1月12日～13日)／「2005年情報学シンポジウム」―社会システムを支える情報
学―(NII後援、1月20日～21日)／ワークショップ「電子ジャーナルのビジネスモデル構築と学術出版をめぐる動向」の開催／NII研究員の紹介

7 **大学院教育** 大学院生紹介

8 **事業活動** 教育研修事業の開催報告／GeNii(ジーニイ) :NII学術コンテンツ・ポータルの正式運用開始

9 **トピックス** 平成16年度 国立情報学研究所 市民講座「8語で深める情報学」(平成17年1月20日・2月17日)／知的財産本部ニュース

●お知らせ 今後の研究会・シンポジウム・行事等の予定

所長就任に当たって

国立情報学研究所長
坂内 正夫



2005年4月1日から、国立情報学研究所（NII）所長に就任致しました。末松前所長、猪瀬初代所長によって築かれてきた活動を、大学等の学術コミュニティの方々、研究所メンバーや関係の方々と共に更に発展させ、NIIの社会的使命を果たしていきたいと、強い責任と緊張を感じております。

さて、昨年スタートした国立大学等の法人化の根底で問われているもの、それは「学術コミュニティが社会にとって何なのか」と考えています。その問いに答えるためには、学術コミュニティの個々の研究機関が自らの使命・役割を明確にし、他ではできない特徴ある活動をプラン、実行し、成果を効果的に発信していくことが不可欠です。

NIIの使命と特徴的な役割は次のようなものと認識しています。即ち、我国唯一の情報学の学術総合研究所として情報学という新しい学問分野での「未来価値創成（学術創成）」すること、また共同利用機関として「情報学活動のナショナルセンター的役割」を果たすこと、更に今や学術コミュニティ全体の研究・教育活動に不可欠な学術情報基盤（先端的学術情報ネットワークやコンテンツ）の事業を展開・発展させること、そしてこれらの活動を通して「人材育成」と「社会・国際貢献」につとめることです。

特に「未来価値創成」：ITブームからバブル崩壊の10年の歴史を経て、今、情報学分野に求められているのは、人や社会に從來ない実価値を創成するためのボトルネックの難問・課題の解決法の提供であることが明確になったと考えています。この意味での情報学分野研究に求められる使命と期待はますます大きくなっています。

また、「情報学のナショナルセンター」としての役割：我国が情報学分野で国際的なリーダーシップをとっていくためには、今、全国の大学、研究機関、産業界、省庁、そして市民が一丸となったビジョンの共有、活動の連携が不可欠です。法人化後、ある種の競争下におかれている各組織を横に繋ぐ共同利用機関としての役割の重さは倍加しています。

更に「先端的学術情報基盤事業」：研究・教育や産業の国際競争力の死命を制するものとしての学術研究・教育情報基盤への認識が高まり、超高速ネットワーク、研究グリッド、リソース／研究成果としてのソフトウェア／データベース等を有機的に統合する「次世代学術情報基盤構築」が、欧米の例を引くまでもなく我国喫緊の重要課題です。現在の学術情報基盤提供事業をシームレスに且つ、速やかに次世代につなげていくことの重要性を改めて強く感じています。

これらにも示されるように、NIIの使命は設立5年を機に、更に重要性を増していること、そして研究所の活動を更に活性化させこれに応えるべきことを強く感じています。前向きに力強く進んでいきたいと考えておりますので、何卒御理解とお力添えを賜りますよう心からお願い申し上げます。

退任挨拶

前 国立情報学研究所長
末松 安晴



平成16年度末日をもって任期を終え、所長を退任することになりました。

振り返ってみると、私は本研究所設立後に間もなく急逝された猪瀬博初代所長の後任として就任した。本研究所は、学術情報センターを母体として改組・拡充し、猪瀬博初代所長のご尽力の下に、平成12年4月に文部省大学共同利用機関の国立情報学研究所として設立され、情報化時代の学術基盤としての情報学研究を推進すると同時に、学術情報の先端的流通のための各種事業を運用する情報学の中核的研究機関を目指して、「研究と事業の車の両輪運用」を掲げた独特の研究所として発足した。しかし、同年10月、猪瀬博所長が急逝され、その後を承って、平成13年4月から2代目の所長として、研究所創生期の立ち上げと、法人化及び機構への転換という変革の荒波に直面した。

平成14年、当時世界最高速の10GbpsのSuperSINETが開設され、Webcat-Plusが公開されて好評を博し、学術コンテンツ・ポータルGeNii構築が始まった。また、総合研究大学院大学の情報学専攻が開設され、企業のご支援による「羽鳥資金」を運用して、国際大学院コースと連携して優れた留学生を受け入れる体制が築かれた。平成15年には、グリッド研究の国家プロジェクト(NAREGI)や、国際学術情報流通基盤整備事業(SPARC/JAPAN)が開始された。この間、国立大学法人化の政策と連携して、大学共同利用機関法人化の検討が進められ4法人に集約されることになり、当研究所は、平成16年4月から情報・システム研究機構に加わり、それまでの国家公務員から非公務員の立場となって、新しい体制が発足した。今、同機構に創設された新領域融合研究センターへの貢献が求められている。また、日本のIT競争力は8位に上昇した。現在、さらに第3期科学技術基本計画への議論が進められている。

人類は適切に知識を活用して地球上に躍進してきた。この知識の活用と流通に直接関わる「情報学」を根元的に推進する本研究所の重要性には疑念の余地がなく、今後も将来に向けて一層の充実と飛躍が期待されている。本研究所は、研究と事業を連携して進める独特の研究所として、教員と事務職員相互間の信頼感が高く連携が極めて良い。こうした優れた特徴は今後も一層緊密にしていきたいと望んでいる。新しく就任される坂内正夫所長は優れた研究実績を持ち、管理運営の経験に精通し、また、各種審議会の委員を務めるなど、卓越した人物である。法人化後も日が浅く、これから多くの課題を抱えている当研究所が新所長を中心に団結して諸課題の解決に当たり、国の中核的研究機関としてますます発展することを祈るものである。最後に改めて、担当の文部科学省関係者各位、森 亘 元評議員会会長を初め関係者各位、佐和 隆光 元副所長、坂内正夫 副所長、小野 欽司 元研究総主幹、羽鳥 光俊 元開発・事業部長、東倉 洋一 開発・事業部長、根岸 正光 国際・研究協力部長、上野 晴樹 専攻長、研究主幹各位、松岡 憲雄 元管理部長、千葉 秀夫 元管理部長、瀬倉 通利 管理部長、そして教職員各位のご尽力とご協力に感謝して、退任の挨拶とする次第である。

キーワードマップ型情報可視化システムの
インタラクティブ情報収集への応用に関する研究

大量の文書やWeb等の情報を検索するにあたり、その結果を視覚的に理解しやすい形で可視化して提示するシステムが数多く構築されてきている。知的活動における視覚情報の役割の解明は人工知能や認知科学における大目標の一つである。可視化システムの構築はその解明に寄与することが期待できるだけでなく、時間変化を伴う情報を扱う上での固有の課題（例えば話題の検出やその追跡などの手法の開発など）を研究する上で興味深い。このような情報可視化システムの共同研究を、東京都立科学技術大学の高間康史助教授と行なっている。

キーワードマップ型情報可視化システムは、文書中から抽出したキーワードを共起関係に基づき2次元空間上に配置するものであり、文書集合中の話題分布や情報ストリームなど、Web空間に分散して存在する弱構造情報の提示に適していることが知られている。共同研究を行なう以前からキーワードマップ型情報可視化システムについて研究を進めており、マップ上のキーワードクラスタの発見を容易にするランドマーク発見手法や、時系列文書集合族から情報ストリームを発見する手法などについて研究を行なってきた。

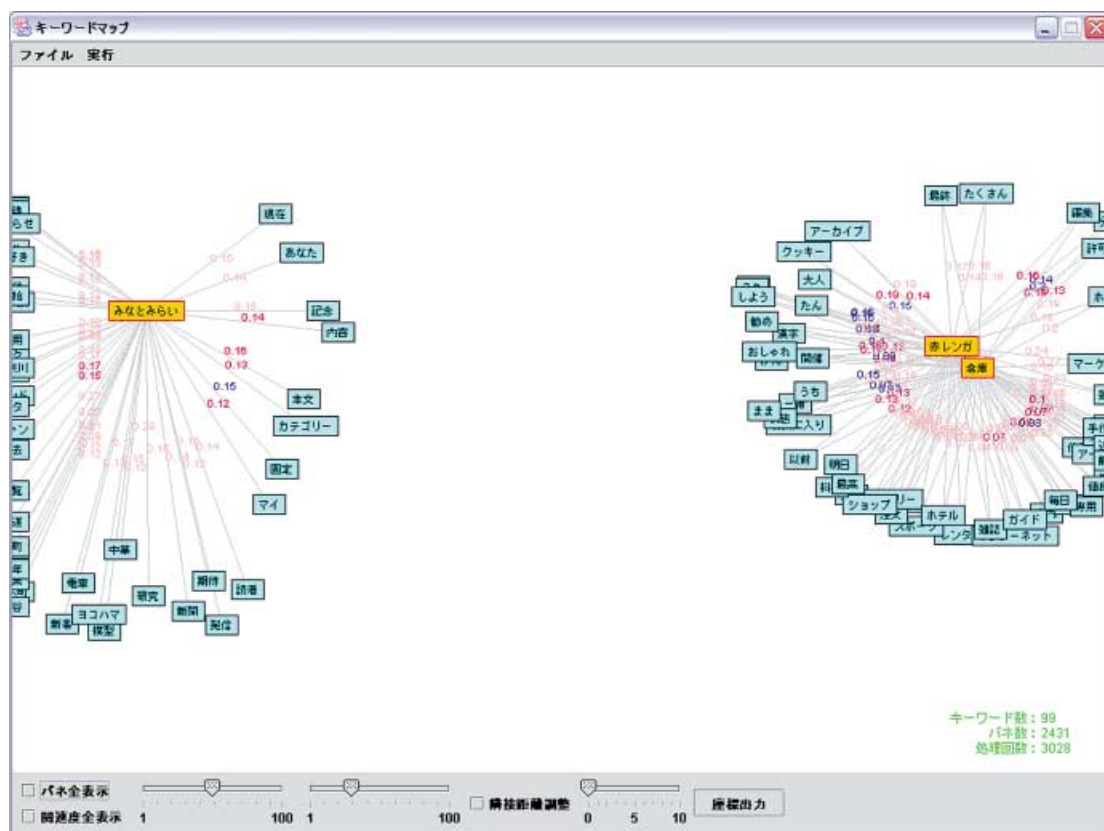
本共同研究では、キーワードマップ型情報可視化システムの
情報提示能力を生かしつつ、ユーザのキーワード配置編
集操作を可能とすることにより、ユーザの興味推定およびこれ

に基づく対話的情報収集を実現する事を目指す。従来、対話的情報収集手法としては適合性フィードバックが有名であるが、検索結果として得られる個々の文書をユーザが評価する必要があり、ユーザの作業負荷が問題であった。本共同研究ではキーワード配置の編集という自然な操作に込められたユーザの興味を暗黙的に推定することにより、ユーザの負担の少ない対話的情報収集を可能とする効果が期待できる。具体的な研究内容としては以下の通りである。

- 1) これまでに開発してきたキーワードマップ型情報可視化システムを改良し、ユーザによる自由な配置および編集を実現できるようにし、ユーザ興味の推定に必要な情報を記録する。また、検索エンジンとの連携を実現する。
- 2) その改良システムを用いて被験者実験を行ない、ユーザ興味推定アルゴリズムを開発する。
- 3) 上述の成果をもとに、キーワードマップ型情報可視化システムに基づく対話的情報収集システムを実装し、被験者実験により評価する。

キーワードマップ型情報可視化システムをblog (Bulkfeeds) に適用した実行例を示す。この例では、「赤レンガ、倉庫」を「みなとみらい」から離して配置した結果、両話題が別のものとして分離して可視化されている。

(知能システム研究系知識処理研究部門 助教授 村田 剛志)



■ コンピュータによる情報・コミュニケーション活動支援の研究

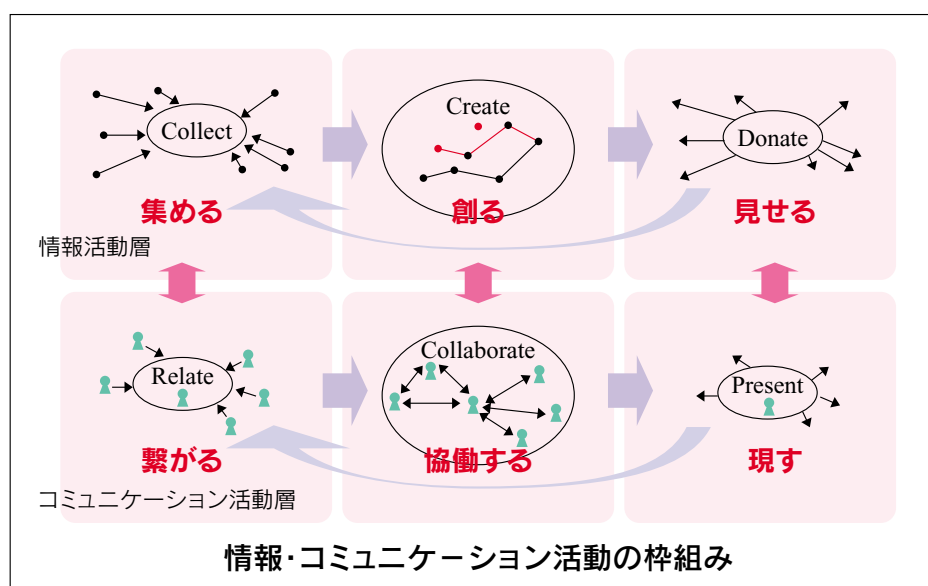


皆さんは今、何のためにコンピュータを使っていますかと聞かれたら、どう答えるでしょうか？Webを見るため、電子メールのため、そんな答えがきくと返ってくると思います。でもそういう答えはすでに技術指向の発想に私たち自身がはまっています。そういう発想に捕らわれてしまうと、ドグイヤーなどと揶揄されるような急速な技術発展を追いかけることで疲れてしまいます。本当に私たちがコンピュータでしかたつたのは、誰かの考えを知りたかったり、人とコミュニケーションをしたかったり、自分のアイデアを披露したかったり、といったことのはずです。

そこで私たちは人間の活動、特に情報に関わる活動とコミュニケーションに関わる活動の大まかな枠組みを考え、その中でコンピュータに現在必要とされる機能を考え、それを実現しようと努力しています。右の図にその枠組みを示します。図の上段は情報に関わる3つの活動、「集める」「創る」「見せる」を示しています。実は私たちのこのような情報活動は人との関わり合いと密接につながっています。たとえば、Googleで何かを調べたとしても、わからない時はその結果を知ってそうな人にみてもらったりするといったように、人間関係を利用しています。それ示したのが下段のコミュニケーション活動の「繋がる」「協働する」「現す」です。

私たちの研究では特にこの中で、下段のコミュニケーション層をいかにコンピュータが横断的に支援できるかについて研究を行っています。人間間・情報源間での情報共有の方法、人のネットワークの再構成の方法などといった基礎的な問題も研究していますが、とくに実際に使ってもらえるようなアプリケーションを構築して、その上で研究を行うことを推進しています。実際の学会会議で使ってもらった人間関係を用いたスケジュール支援システムやWeblogを基盤として人間間でのコミュニケーションを促進させるシステム（semblogプロジェクト）とったことを行っています。詳しくはWebページ（<http://www-kasm.nii.ac.jp/>）をご参照ください。

（実証研究センター共同研究企画推進室 教授 武田 英明）



国立情報学研究所情報学オープンフォーラム

第4回 <1月31日>

■ 国際学術情報流通基盤整備事業と日本の数学雑誌



ソフトウェア研究系データ工学研究部門 教授

情報学資源研究センター長

安達 淳

（あだち じゅん）

1981年東京大学大学院工学系研究科電子工学専攻博士課程修了。東京大学助手、助教授を経て、1986年学術情報センター助教授。2000年より現職。電子図書館、分散情報システム、データベース、情報検索等の分野でテキストを中心とする電子コンテンツ活用技術に関する研究に従事。また情報システムとして電子図書館システムNACSIS-ELSやNII学術ポータル構築に従事してきた。

国立情報学研究所は、2004年4月から大学図書館と連携協力して、我が国の生産する学術論文の電子的な流通を拡大する事業を開始しました。この事業では、日本の学会等が発行する学術雑誌を電子ジャーナルとして流通させ、その結

果として我が国の研究成果の認知度を向上させ、日本の研究活動に対する正当な評価と認識を得ることを目的としています。その中で、我が国の優れた数学雑誌を国際的なポータルEuclidから提供する活動が軌道に乗ってきました。このような活動全般について紹介しました。

世界数学電子図書館 — 数理科学における基盤構築の必要性



イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 教授

前 NSF数理科学部門 長官

Phillippe TONDEUR

(フィリップ・トンデュール)

フィリップ・トンデュール教授は、1932年12月3日チューリッヒ生まれ。1961年にチューリッヒ大学大学院でPh.D.を取得後、パリ大学、ハーバード大学、カリフォルニア大学などを経て、1970年にイリノイ大学正教授となる。1996年から1999年までイリノイ大学数学科主任を務め、1999年から3年間米科学財団 (NSF) の数理科学部門長官として数理科学の発展に尽した。トンデュール教授の専門は、微分幾何学、とくに葉層構造の幾何学と偏微分方程式の幾何学への応用の権威で、9冊の著書と100篇におよぶ研究論文の多くが、その分野の基本的文献となっている。

本講演では、数理科学における重要な研究基盤、すなわち過去350年に渡って数理科学専門誌に掲載されてきた学術研究遺産の利用手段についてお話したいと思います。

私はこの問題を、グローバル・サイエンスへ向けての戦略の観点から、特に科学エンタープライズにおいて数理科学が果たす役割の観点から議論したいと思います。

この役割とは、既に広く浸透している基礎理工学の知識基盤をさらに充実させ、科学者や技術者ならびに学識のある市

民のグローバルな労働力を向上させるとともに、広範に利用可能な理工学基盤を提供することを指しています。

本講演では、世界の数学における学術文献を、包括的に取り込むことを目的とした最新の活動について説明いたします。

その主な取り組みの例として、国際数学者連合 (International Mathematical Union (IMU)) の傘下で現在進行中の、世界各地で実行されている数多くのデジタル化活動の連携化について説明いたします。

文部科学省科学研究費補助金 (特定領域研究)

「ITの深化の基盤を拓く情報学研究」平成16年度成果報告会 (1月12日～13日)

2005年1月12日 (水) ～13日 (木) に学術総合センターにて、文部科学省 科学研究費補助金 特定領域研究「IT深化の基盤を拓く情報学研究」(領域名:情報学、領域代表:安西祐一郎 慶應義塾長、期間:平成13～17年度) による平成16年度領域成果報告会が開催されました。

成果報告会では、領域を構成する6つの研究グループに分かれた研究会が開催され、研究活動状況の紹介や今後

の研究課題に関する活発な討論が行われました。また、13日 (木) 午後には、一橋記念講堂にて公開シンポジウムが開催され、平成16年度成果概要の紹介に続き、最終年度に向けた成果の取りまとめ方法についてパネルディスカッションが行われました。最後に、領域代表である安西 祐一郎 先生 (慶應義塾長) の挨拶で盛況のうちに閉会しました。

特定領域「情報学」では、情報に関する基盤的な学術成



パネルディスカッションの様子



安西 祐一郎 先生による領域代表挨拶

果をあげることを目的に、約100の研究班が、情報学の様々な分野にかかわる研究に取り組んでいます。国立情報学研究所は情報学分野の大学共同利用機関として、様々な形で領域の研究や運営に協力しており、今回の報告会でも、研究グループ・リーダーをつとめる安達 淳 情報学資源研究セ

ンター長(当時)をはじめ9つの研究班が参加しました。本領域の具体的な研究内容や成果報告書につきましては <http://research.nii.ac.jp/kaken-johogaku/> に掲載してありますので、興味のある方はご参照下さい。

(情報学資源研究センター資源構築利用推進室 教授 相澤 彰子)

「2005年情報学シンポジウム」

ー社会システムを支える情報学ー (NII後援、1月20日～21日)

2005年1月20日(木)～21日(金)、日本学術会議講堂において2005情報学シンポジウムが開催されました。「情報学シンポジウム」は、ネットワーク化社会における情報の円滑な流通と高度な利用の促進を目的に、1984年以来毎年、多数の学術団体の共催・後援を得て開催されています。22年目にあたる本年は、「社会システムを支える情報学」と題して、ITSやロジスティクス、知識流通等の社会基盤に焦点をあてた

企画が行われました。2日間のシンポジウムは、2件の基調講演、6件の招待講演、一般口頭発表、ポスター発表を含む大変充実した内容でした。1日目には、坂内 正夫 副所長(当時)による基調講演「社会型情報システムとしてのITS」があり、参加者はITSの社会的効果や最新の研究成果について熱心に聞き入っていました。

(情報学資源研究センター資源構築利用推進室 教授 相澤 彰子)

ワークショップ

「電子ジャーナルのビジネスモデル構築と学術出版をめぐる動向」の開催

国際学術情報流通基盤整備事業では、標記のワークショップを平成17年1月27日(木)に、日本教育会館9階第5会議室にて開催しました。

今回、講師として、米国Cornell大学図書館の電子出版部門のディレクターであるTeresa Ehling氏と、Informed Strategies社の代表取締役のJudy Luther氏を招へいました。

ワークショップの前半は、Ehling氏から、Cornell大学図書館の電子出版活動の概要について、また、Luther氏からは、電子出版のコンサルタントとしての立場から電子ジャーナルのビジネスモデル構築の必要性について講演が行われました。

後半は、国際学術情報流通基盤整備事業選定誌から、3つの分野の英文学術雑誌の状況について報告があった後、大学図書館から見た学術雑誌をめぐる動向について報告が行われました。当日は、学協会の編集者、事務局員や大学図書館、学術雑誌のプロダクション関係者などが一同に会し、電子ジャーナル化とビジネスモデル構築について議論を深める好機となりました。

このワークショップの内容や資料は、国際学術情報流通基盤整備事業のHP (<http://www.nii.ac.jp/sparc/>) で公開しています。

(コンテンツ課)



Teresa Ehling氏



Judy Luther氏

NII 研究員の紹介

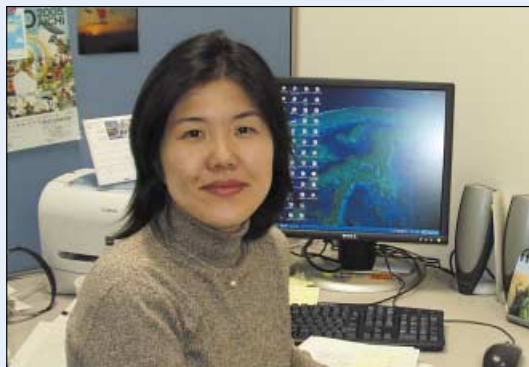
情報学資源研究センター プロジェクト研究員

石川 治子

(いしかわ はるこ)

1992年 学習院大学物理学科で理学士を取得

2000年 クイーンズランド大学機械工学部で博士号を取得



2003年の11月から、NTCIRプロジェクトのポスドクとして働くために11年ぶりに日本に帰国いたしました。私の研究職歴は短く、特に情報工学の研究所で働くことは初めてで、帰国前はフランスのピエール・アンド・マリーキュリー大学及びLIMSI-CNRSで音響冷凍機とその熱交換器についての熱力学的な分析、その前は短期間でしたがオーストラリアの連邦科学技術研究機構(CSIRO)の探査・鉱山開発部門で炭鉱内のガス分布のシミュレーションをしました。情報学分野の研究には以前から憧れ

に近い興味を持ち、幸運にもNIIのポスドク募集をウェブサーチでみつけました。着任後、前半は主にNTCIR及びNTCIRウェブタスクの運営アシスト、後半はNTCIR4ウェブタスクの結果を元に、検索課題の種類及びWebページの形式と検索手法との間の関係の分析等もしております。データの分析・評価の仕方には分野を越えた共通点もあり、とても興味深く楽しくプロジェクトに参加させていただいており、残りの任期が充実したものとなるよう努めたいと思います。

大学院教育

大学院生
紹介

上岡 恵子 (かみおか けいこ)

総合研究大学院大学複合科学研究科

情報学専攻 博士課程2年(指導教官 山田 茂樹教授)



大学のコンピュータ研究会の部室で「こんな時、コンピュータから『分かるヨ、その気持ち。』と言ってほしい。」これがコンピュータをもっと知りたいと思ったきっかけである。その後、「コンピュータで人を幸せにしたい。」と私はシステムエンジニアになり、システムインテグレータとして情報処理システムを設計、構築し、ERP※1パッケージを導入してきた。システム引渡し後7年以上使い続けて下さっているお客様もいるし(これは利用者がシステム機能や業務での使い方に精通するにつれ、高度な使い方ができるように設計した結果だが、機能追加で次の受注が取れなくなり、営業からは文句を言われた。)、プロジェクトの結果、客先キーマンを「さびしい部門」に異動するのを助けられなかったこともある。そして次第に「このシステムが経営戦略をどう支援するかを提案したい。」と中小企業診断士を取得

した。そして、今は業務コンサルタントである。コンサルタントとして、お客様に新しいビジネスモデルを構築し、革新的なITを提案し、企業価値向上に貢献したい。しかし、テイラーの時代から、工場の現場やQC活動で改善や革新を模索、実現してきたこの分野で、今、新しい「玉」が見つからない。「それならば私がその『玉』を作る!」と革新的なITのコア技術として工場でのRFIDタグに注目し、研究テーマとした。もちろん、その真のゴールは「コンピュータで人を幸せにしたい。」である。

※1) Enterprise Resource Planning

教育研修事業の開催報告

国立情報学研究所では、平成16年度 of 教育研修事業を次のとおり開催いたしました。

＜講習会＞

目録所在情報サービス業務担当者を対象に、データベース内容や運用方法の修得を目的として実施しています。

講習会名	受講者数	応募者数	備考
目録システム講習会（図書コース）	169	272	NII会場・5回
目録システム地域講習会（図書コース）	213	258	各大学図書館会場・12回
目録システム講習会（雑誌コース）	101	204	NII会場・3回
ILLシステム講習会	101	178	NII会場・3回
日本研究情報専門家研修併設目録システム講習会	8	9	NII会場・1回

各大学のご協力ももちまして、のべ約600名に受講していただくことができました。

＜専門研修＞

学術研究活動支援の中核的役割を担う職員を養成するための知識や技術修得を目的として実施しています。

研修名	受講者数	応募者数	備考
情報処理軽井沢セミナー	8	22	NII／国際高等セミナーハウス会場・1回 前半は学術ポータル担当者研修と合同
情報セキュリティ担当者研修（情報セキュリティ基礎コース）	60	79	外部会場・3回
情報セキュリティ担当者研修（ネットワーク管理者コース）	43	48	外部会場・3回
情報ネットワーク管理担当者研修	80	113	外部会場・3回
総合目録データベース実務研修	21	25	NII会場・2回
学術ポータル担当者研修	34	123	NII会場・1回
学術情報リテラシー教育担当者研修	100	184	大阪大学会場／NII会場・2回
大学図書館職員講習会	164	205	京都大学会場／東京大学会場・2回

学術ポータル担当者研修及び学術情報リテラシー教育担当者研修は、昨年度の試行開催を経て、今年度から定常的研修として実施しました。学術ポータル担当者研修は34名の定員に対して倍率3.6倍を超える123名、学術情報リテラシー教育担当者研修は2回計100名の定員に対して184名と多くの受講希望があり、両研修への期待の高さがうかがえました。

また各外部機関との連携により、次の事業を実施いたしました。

- 研究所の各サービスに関して各機関が独自に実施する講習会や説明会等への資料提供や利用者番号貸与等の支援事業
- 文部科学省主催「情報セキュリティセミナー」のSCS [スペース・コラボレーション・システム] 配信（メディア教育開発センターの協力による）及びストリーミングでの配信
（平成15年度まで開催の情報セキュリティ講座の代替とした）
- 国際交流基金／国立国会図書館主催「日本研究情報専門家研修」への協力

なお、平成17年度研修事業の詳細は、NII教育研修事業ウェブページ（URL <http://www.nii.ac.jp/hrd/>）及び各機関へお送りする「教育研修事業要綱」でお知らせいたします。

（企画調整課）



学術ポータル担当者研修



学術情報リテラシー教育担当者研修（会場：大阪大学[共催]）

■ GeNii (ジーニイ) : NII 学術コンテンツ・ポータルの正式運用開始

平成17年4月から、NII学術コンテンツ・ポータル“GeNii”の正式運用を開始します。論文情報・図書情報など、コンテンツの特徴に応じて検索・表示する個別のサービスを提供するとともに、全てのコンテンツをまとめて検索できる「GeNii総合検索システム」を提供します。

● GeNii総合検索システム【無料】<http://ge.nii.ac.jp/>

● GeNiiのサービス

・ CiNii (サイニイ) : NII 論文情報ナビゲータ【一部有料】
<http://ci.nii.ac.jp/>

日本の学術論文を検索し、その引用文献情報(どの論文を引用しているか、どの論文から引用されているか)を辿ったり、本文を参照したりすることができます。

引用情報を含む詳細な書誌情報の表示は有料です。また、本文には無料のもの・有料のものがあります。

・ Webcat Plus (ウェブキャット・プラス)【無料】<http://webcatplus.nii.ac.jp/>

大学図書館等で所蔵する図書・雑誌を探せます。日本語・英語図書は、内容・目次情報を見たり、「連想検索機能」により求めるテーマに関連する図書を効率的に探したりすることができます。

・ KAKEN: 科学研究費成果公開サービス【無料】<http://seika.nii.ac.jp/>

文部科学省科学研究費補助金の助成を受けて行われた研究の採択課題・成果概要が探せます。1つの課題について、研究期間の年次を追って通覧することができます。

・ NII-DBR: 学術研究データベース・リポジトリ【無料】<http://dbr.nii.ac.jp/>

研究者グループ等が作成した複数の専門的なデータベースを、同時に、あるいは個別に、検索できます。

(コンテンツ課)



■ 平成16年度 国立情報学研究所 市民講座「8語で深める情報学」

第7回：平成17年1月20日(木)

「デジタル放送」



国立情報学研究所 情報基盤研究系 教授

曾根原 登 (そねはら のぼる)

信州大学より博士(工学)取得

日本電信電話公社 横須賀電気通信研究所 画像通信研究部 入社

1988年 国際電気通信基礎研究所 ATR視聴覚機構研究所 認知機構研究室主幹

1992年 NTTヒューマンインタフェース研究所 映像処理研究部GL・主幹

2000年 NTTサイバースペース研究所 メディア生成プロジェクトPM・部長

2001年 NTTサイバースソリューション研究所 コンテンツ流通プロジェクトPM部長・主席

2001年 東京工業大学大学院 理工学研究科 連携講座 客員教授

2004年 国立情報学研究所 情報流通基盤研究系 教授(工学博士)

専門は情報流通システム工学、デジタルメディア工学、デジタル著作権、デジタル権利管理、知的財産権の証券化

これからのデジタル情報流通は、ブロードバンド、放送、モバイルネットワークなど多様なメディアを使った境目のない情報流通になっていくでしょう。コンテンツも、音楽、放送番組、デジタル・シネマ、教育番組などの映像コンテンツやマルチメディア・コンテンツへとひろがっていきます。そこには、技術的だけではなく、法制度や経済学的な未解決の課題もあります。そこで、

今回の市民講座では「デジタル放送」を題材に、IT革命、デジタル革命がもたらすネット社会について考えました。市民として、文科系や理科系の専門家として、一緒にこれから創っていくべきIT社会の未来像を考えましょう。未来像を考えるうえで、幾つかの切り口からのお話を準備いたしました。

第8回：平成17年2月17日(木) 「デジタル・アーカイブ」



国立情報学研究所 情報メディア研究系 教授

山本 毅雄 (やまもと たけお)

1967年東京大学大学院理学系研究科化学専門課程 博士課程修了。同年東京大学理学部助手(化学教室)。米国ノースカロライナ大学博士研究員、東京大学大型計算機センター助教授を経て1981年図書館情報大学図書館情報学部教授。1995年図書館情報大学副学長に就任する。2001年より国立情報学研究所 情報メディア研究系研究主幹・情報検索研究部門教授。図書館情報大学名誉教授。

1. 世界のデジタル・アーカイブ

デジタル・アーカイブとは：学術・文化資料を集め、これをデジタル形式にして、長期保存・利用すること。最近、この重要性が広く認識されるようになり、世界中にさまざまなデジタル・アーカイブができています。今回は講師のことに好きなデジタル・アーカイブのいくつかの紹介があった。American Memory (米国議会図書館)、NASA Kids、Treasures in Full (英国国立図書館)、京都大学図書館 貴重資料画像、アジア歴史資料センター (国立公文書館)、近代デジタルライブラリー (国立国会図書館)、文化遺産オンライン (文化庁・総務省・NII) など。

2. デジタル・アーカイブはなぜ今必要かを、次の項目から説明があった。

・保存と利用の両立→(OAIS)・拡大、デジタル修復、

立体モデル作成が可能・他の資料との比較、統計処理などが容易・保存コストの低下、技術の進歩・資料の消滅、機会の消失

3. デジタル・アーカイブの問題点を、次の項目について説明があった。

・デジタル化の技術とコスト→低下してきた・ハードウェアの故障→RAIDで相当解決・コンピュータ、OS、入出力機器の変化→エミュレーション・検索・利用ソフトウェアの変化→マイグレーション・標準の変化、法律の変化・アーカイブの組織変化、大惨事→ネットワーク形成

4. 東洋文庫所蔵貴重書デジタル・アーカイブの紹介をおこなった。

(広報普及課)

知的財産本部ニュース

特許法第35条(職務発明)の改正に伴う機構職務発明等規程の改正について

昨年从今年にかけて知的財産に関して注目を浴び、そして不思議な結末として話題を集めた一つに青色発行ダイオードの発明対価事件があった。発明者と使用者が訴訟上の解決を求めた結果、地裁判決と高裁の和解に極めて大きな格差が生じてしまい「裁判所って何を考えているの」という声が上がった。この事件の論点となった職務発明の対価について特許法第35条では、勤務規則等で、発明に基づき特許を受ける権利を従業者から使用者が承継することを予め定めることができること(第35条第2項)、従業者には、相当の対価の支払を受ける権利があること(第35条第3項)を規定している。しかし、平成13年のオリンパス事件でその対価の額は、勤務規則ではなく裁判所によって決める強行規定であるとされた。そこで私的自治を徹底するための法改正が行われ、使用者と従業員とが合理的に協議された勤務規則

ならばそれをもって当事者間の最終解決にすることができることとなり、本年4月1日から施行されることになった。これを受けて機構では、改正の趣旨に従い、使用者と教職員との協議をWebサイトにより昨年12月21日から本年2月10日运行い、その間二度にわたり照会と回答を実施した。照会中にいただいた数々の意見を丁寧に受け止め、外部の有識者との意見交換を重ね、3月から職務発明等規程の最終案をWebサイトに掲載し、決裁手続を経て4月1日からの改正法の施行に対応したいと考えている。

(情報・システム研究機構知的財産本部)

お知らせ

■ 平成17年度 国立情報学研究所オープンハウス

当研究所の研究活動、大学院紹介、事業活動、研究成果を広く知っていただくために行うものです。オープンハウスへの参加は無料です。また、初日には千代田ITフォーラム、市民コンサートも開催します。

日程：平成16年 6月 2日(木)～ 3日(金)

会場：学術総合センター 1・2階

※詳細についてはURL <http://www.nii.ac.jp/hrd/HTML/OpenHouse> でお知らせしています。



国立情報学研究所の研究・事業活動について
詳しくはホームページもご覧ください。

<http://www.nii.ac.jp/index-j.html>

国立情報学研究所ニュース 第27号 <平成17年4月>

発行／大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構

国立情報学研究所 National Institute of Informatics

国立情報学研究所ニュースに関するお問い合わせは広報普及課 企画・広報係まで

〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2-1-2 学術総合センター

TEL: 03-4212-2135 E-mail: kouhou@nii.ac.jp